

平成16年3月18日

原子力委員会

長計についてご意見を聴く会（第9回）

## なぜ市民参加が必要になっているのか

南山大学人文学部

小林傳司

### 1、 コンセンサス会議とは何か

- ・テクノロジー・アセスメント手法の一種（他にも手法はある）
- ・社会的に対立のある問題を対象とする（多くが科学技術絡み）
- ・素人が主役（市民パネル） 市民パネルだけで報告書作成
- ・多様な専門家が参加（対立する専門家）
- ・事前に結論は想定されない
- ・メディアの重要性 / 評価者の必要性
- ・政策との関係

### 2、 コンセンサス会議から見えること

- ・参加者、特に、市民パネルの満足感（もっと議論を、もっと回数を）
- ・社会的対立点、課題の顕在化、可視化（発見的機能が大きい）
- ・専門家の相対化（学習すべきはむしろ専門家）
- ・合意は必ずしも形成されない メタ・コンセンサス

### 3、 コンセンサス会議への批判

早く到達されすぎたコンセンサス：

十分な議論が実は尽くされていないのにコンセンサスに到達してしまう可能性。

見かけだけのコンセンサス：

参加者が発言を控えることによってコンセンサスが生じる可能性。

不適切な参加者によるコンセンサス：

適切な当事者が加わらずに形成されたコンセンサスが生じる可能性。

一時的なコンセンサス：

ある時点では妥当なコンセンサスであっても、状況、価値観、知識の変化によってコンセンサスの妥当性が失われる可能性。

**詳細は小林傳司『誰が科学技術について考えるのか』名古屋大学出版会、2004年を参照**

#### 4、なぜ、今、日本社会は参加や対話に関心を持つのか

- ・パブコメ、合意形成、対話、リスクコミュニケーションの大流行
- ・日本だけではない：先進国共通の現象

例 POST 報告書

##### A：短期的説明

1995 年：もんじゅ事故 円卓会議、阪神大震災、オウム真理教事件、O-157 事件、薬害エイズ、  
科学技術不信、行政不信の顕在化

##### B：長期的説明 - 1970 年前後の変化

- ・豊かさの分配という課題の達成（＝福祉国家の形成）
- ・科学技術および企業の存在の巨大化
- ・人々の意識の変容（自然の支配への懐疑）
  - 科学技術を駆動する価値観と豊かさを求める人々の価値観の予定調和の終焉
  - 高学歴で豊かな人々の出現 価値観の多様化（手段的価値群から即自的価値群への変化） 包括的政策対応の限界（山崎正和「柔らかい個人主義」、村上泰亮「新中間大衆」）
- ・シングル・イシューをテーマにした「憂慮する人々」の出現
- ・トランス・サイエンスあるいはポスト・ノーマル・サイエンス的状况
- ・冷戦構造によるマスク

#### 5、何のための対話か

OPEN CHANNELS: public dialogue in science and technology. POST 2001 報告書（英）

- ・目的の明示：なぜ対話を行うのか
- ・正統性の確保：プロセスの公正さ、方法、時期の適切さ、参加者の適切さ
- ・評価：プロセスの質の評価

理想型としての「円卓会議」(ベック)

専門的知識の独占排除  
参加者ベースの拡大  
意思決定の創出  
開放性の原則

#### 6、原子力について

- ・信頼の喪失という状況でのコミュニケーション
- ・解決マニュアルはない
- ・過去の「円卓会議」の検証を